

# 中国帰国者の子弟のアイデンティティ形成に関する追跡調査<sup>(1)</sup>

—— 思春期に中国からやってきた子供たちの  
来日10年目と18年目のインタビューの記録 ——

永井 智香子

キーワード：アイデンティティ、中国帰国者、思春期

## はじめに

2005年は戦後60年にあたる年であるが、まだ中国から残留邦人が肉親探しのために来日している。そして、その多くは故国日本への永住帰国を希望する。その大半は家族を伴った「帰国」となるが、異言語、異文化の中での生活はことのほか大変である。その中に自分の意思ではなく、家族に伴われて日本に来るまだ成長途上にある思春期の子どもたちもたくさんいる。思春期<sup>(2)</sup>は人間のライフステージの中で「自分は一体何者であるのか」「自分は何になりたいのか」などを自分自身に問う非常に大切な時期であるとともに非常に不安定な時期でもある。そのような時期に文化間移動を行うということはそのアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼすのであろうか。本記録は思春期に中国から来日した4名に来日10年目と18年目にインタビューを実施し、その結果をアイデンティティの形成に焦点をあててまとめたものである。

## 1. 先行研究からわかること

今までに、思春期に中国から来日した人々のアイデンティティに関する調査がいくつか行われている。

たとえば、周（1991）は中国から来た若者のアイデンティティの実態と影響因を質問紙と面接において探ろうとした（113名に調査し、調査時の年齢はそのほとんどが16歳から18歳で、その84%が来日4年未満）。その結果、民族的アイデンティティが二つの文化の狭間で揺れ動き、境界的な状況の中にいるということを経験し、その状況を受容しながら「中国」「日本」をなんとか統合しよ

うとするという状態にあることがわかったという。福岡（2002）らは15歳のときに両親とともに中国から来日した20歳の大学1年生にインタビューをし、そのアイデンティティに関する考察を試みている。その結果「オモテウラのアイデンティティ戦略」を採用しようとしているのではないかとした。つまり、表面的には日本人のように振舞うことを自身で選んでいるが、心の中では中国人である自己を保持し続けていこうと考えている状態であるというのである。さらに、福岡らは「よこならびのアイデンティティ戦略」を提案している。「よこならびのアイデンティティ」とは「…たとえば「中国の名前」をなめることで「中国人である自己」をオープンにしつつ、同時に「中国残留婦人」を祖母にもつという機縁で、これからの生活を営んでいきたい自分がいるということも表明していくことをイメージしている」とのことである。また、筑波大学では1995年に開講された「社会調査実習Ⅰ」という授業の一環として中国帰国者二世三世を対象とした面接によるアンケート調査（サンプル数147）が行われている。調査表の中のアイデンティティに関する欄には日本人、中国人、日系中国人、中国系日本人という四種類の選択肢が存在している。その報告書によると、結果は日本人と答えたものは13人、中国人49人、日系中国人36人、中国系日本人17人であったという。帰国時の年齢とアイデンティティに関する結果では、思春期に来日し、ある程度の期間日本に滞在しているものの多くは日系中国人、ないしは中国系日本人と答えているようである。そして、まとめとして「「何人」という枠を超えた新しいアイデンティティ誕生の可能性を秘めている」と書かれている。さらに、自らが思春期に中国から日本に来た帰国者である大久保（2000）は「中国日裔青年」という独自のアイデンティティを提案している。その中身は「…限りなく「完全な」「日本人」は「中国人」に近づき、同時に両方であるあり方に務めながら、両方のどちらにも同化しない…」ということである。つまり、日中両方の言語や文化に精通している者はどちらにも同化しない中間存在者として独自の文化を創り出す可能性があるというのである。

以上、四つの先行研究のアイデンティティに関する結論部分を中心に紹介したが、アイデンティティ形成に影響を与える、ある要因についてもそれぞれの先行研究で触れられている。それは、日本社会の持つ負のエネルギーが中国帰国者のアイデンティティ形成に影響を与えているということである。つまり、日本社会は異質なものに対する差別や偏見があり、そして、異質なものに対して同化を強いる社会であるということが外から来たものへの大きい負のエネル

ギーとなる。そして、思春期というアイデンティティがまだしっかりと定まらないライフステージにある青少年が異なる言語や価値観をもつ中国から「移住」して来た場合、ただでさえ、不安定な時期に日本社会の負のエネルギーを受けると、彼らのアイデンティティは危機に直面し、葛藤を引き起こすのである。そして、そのような状況の中、思春期に中国からきたものたちが辿り着いた彼ら独自のアイデンティティが「日系中国人」「中国系日本人」「オモテウラのアイデンティティ」「何人」という枠を超えた新しいアイデンティティ誕生の可能性を秘めている(状態)であり、提案されているのが「中国日裔青年」や「よこならびのアイデンティティ」なのである。つまり、日本人でも中国人でもない、全く新しいタイプのアイデンティティである。

このように先行研究では新しいアイデンティティの存在の可能性が示唆されている。しかし、筆者が知る限りでは、思春期に来日した人々の長期に渡る追跡研究を行い、その変化にまで言及しているものはまだ見られない。そこで、本稿では思春期に中国から来日した4人のインフォーマントに、来日10年目と18年目にアイデンティティを探るために実施したインタビューの結果を示し、来日10年目と18年目の結果を比較した。

## 2. 調査の概要

1回目のインタビューは1995年の6月から8月にかけて実施し、2回目は2003年の8月から9月にかけて実施した。また、それぞれがどういう回答をしているか互いに知りたいという要望があったので、2004年2月に急遽4人揃ってのインタビューも実施した。

### 2-1 インフォーマントについて

本調査のインフォーマントである4名はいずれも、筆者が1985年にある小学校で帰国者のための日本語教室で働いていたときの教え子であり、その後も定期的に連絡を取り続けていた。なお、プライバシーを配慮し、インフォーマント一人一人をAからDまでのアルファベットで表している。4人の来日年齢、インタビュー時の年齢などは表1の通りである。母親が残留孤児であるDを除いては、祖母が残留婦人である。BとCは姉妹である。また、4人とも1回目と2回目のインタビューの間に日本に帰化している。

表1 インフォーマントについて

	A	B	C	D
入国時の年齢	13歳9ヶ月	14歳2ヶ月	12歳5ヶ月	13歳7ヶ月
編入学年	小学校6年	小学校6年	小学校5年	小学校6年
1回目のインタビュー時の年齢	24歳2ヶ月	24歳2ヶ月	22歳5ヶ月	23歳7ヶ月
2回目のインタビュー時の年齢	32歳5ヶ月	32歳6ヶ月	30歳6ヶ月	31歳9ヶ月

## 2-2 インタビューについて

インタビューの形式は半構成的面接、つまり、質問事項は用意するが調査対象者の発言にそうかたちで臨機応変に展開することを心がけた。1回目の調査のためのインタビュー項目は帰国子女や難民を対象とした追跡研究を参考にし、帰属意識、言語、文化、価値観、人間関係などを考慮に入れて作成した。2回目の調査の質問項目は1回目の質問項目（全てではない）と、1回目の調査の結果を元にした個別の質問項目も用意した。

インタビューは1回目も2回目もそれぞれの自宅で実施し、一人平均1時間から1時間半にわたった。

適切な信頼できるデータをとるにはインフォーマントとの間にラポール（親密な結びつき、信頼関係）が確立されていることが必要であると言われている。教え子であるということで、連絡をとり続けていたが、インタビューを行う前に何度か会い、インタビューの目的などをよく理解してもらった上でインタビューを実施した。

すべてのインタビューは許可をとり、録音した。そして、全部書き起こし、一人一人についてまとめ、データとした。

## 3. 調査の結果

### 3-1 1回目の調査の結果から

1回目の調査の結果を次の三つの項目に分けてまとめた。その3項目とは①「自分は何国人だと思っているか」という質問に対する回答、②「中国で生まれ育ったことに誇りを持っているか」という質問に対する回答、③言語能力や出自に関する発言、の三つである。以下、Aから順番に取り上げていきたい。

A①中国人。

A②そうや、そういう誇り持ってるよ。一番最初にオギャーゆうて出てきた国が中国やからな。

A③新聞はたぶん読めない。手紙も書かない。うん、書けへん。しんどいねん書くの…しゃべるのはしゃべれる。でも、勉強しようと思うねんけど、その気力が、今、ちょっとダウンやね。

B①中国人やけど、そうやけど、なんか中国いや。今はいやになって来た。なんかいややわ。

B②どやろわからん。

B③どっちもどっちやなあ、今は、中途半端やわ、私。日本語緊張すると変になる。ときたま自分がうまいなあって思うときもあるし、下手くそやなあって思うときもある。

C①私中国人や。現実にそうなってるから中国人。

C②ぜんぜん後悔してへんよ。自分が中国人やったていうこと。他の人にじろじろ見られへんかったら…たまにな、一応自分が中国人であることを自覚はしてるけど、どういったらいいのかな、こうわからなくなるときがあるんよ。

C③どっちもどっちやなあ（日本語力と中国語力どっちが上かという質問に対して）

D①日本人に聞かれたら、ううん、そうやなあ、…日本人って答えるかもしれへん。でも、自分では中国人やと思うけど。

D②半分は持ってる。半分ちゃうか。

以上、帰属意識、言語に関する4人の発言を取り出してみた。もちろんそれぞれの発言には違いがある。しかし、来日10年目の4人に共通していることは、その帰属意識が中国にあるということである。しかし、彼らのいう「中国人」の中身について考えてみると、日本、中国と二つの国の狭間に立たされ、日本語、中国語の両方の言語能力に中途半端さを感じたり、中国人であると言ってはいるがその状態に自信が持てなくなったりと不安定な部分を持っているようである。また、思春期に来日して、10年間日本に暮らした4人の「中国人」は

日本と中国の二つの言語と文化を内在していることも事実である。さらに、BとCの次のような発言から、その境界的な状態を冷静に客観的に見ることができ、ポジティブにとらえていることもわかる。「だってさあ、中国人やったら中国しか見えへんやんか。日本来たら中国のいやな面とかいっぱい見えてきたやんか。日本のよさとか、中国のよさとかわかるとかいろんなところ見えてくるやんか。…視野が広がった。人間っていろんなところ行って、いろんなもの見えるやんか。いつも同じところいたら、そこしか見えへんやんか（Bの発言）」「…私は日本の教育受けてきたから、今までこう、小、中、高で、だから、こっちでしか通用しないだろうって。今、中国に行ってもたぶん適応されへんの。だって、それなりの能力いるわけやん。でも、別に中国帰れゆわれても抵抗感はない（Cの発言）」

来日10年後に行き着いているアイデンティティは先行研究としてみてきたような、日本でもない、中国でもない、独自のアイデンティティの存在の可能性を否定できないものであると思われる。

続いて、1回目の調査からさらに8年たったときに実施した2回目の調査の結果をみて、1回目の結果と比較した。

### 3-2 2回目の調査の結果から

1回目の調査をまとめたときと同じく①「自分は何国人だと思っているか」という質問に対する回答、②「中国で生まれ育ったことに誇りを持っているか」という質問に対する回答、③言語能力出自関連に関する発言の3項目について発言を取り上げ、変化についてみてみたい。

A①難しいな何人やろ。何人じゃなくて中国で生まれて13年間いました。そこからここへ来ました。それしか…。何人とは言われへん。

A②どっちとも言えへん。だって、たまたまやからね。たまたまおばあちゃんが日本人で、たまたま来れただけで、ここに何も…。

A③それはやっぱり、何、ちょっとした生い立ちみたいなもの（Aにとって中国語とは）。

A③今、現在、自分の生活で表現できる言葉。中国語で自分の表現できないもん（Aにとって日本語とは）。

B①だから、中途半端しか思わへんねん…。私、今なあ、あきらめたっていうか。もういいやん、住んでたところでいいやんと思う。同じ地球の人やからさ、どこの国でもいいやんと思うようになったかな少し。でも、たまに、どこの国の人ってしょっちゅう、ずっと。

B①もう、しょっちゅうある。もうしょっちゅうあるわ。中途半端やなあ。よう聞かれる。私どこの国かなあ。中途半端やなあって（何人が悩んだことあるか）。

B②別に誇りもってない。誇りを持ってないかなあ。でも、たまに日本人がなあ、中国のあれこれ思うんやけどなあ、みんな中国人が発明したんやで、心の中で思うことある。箸だって、お茶なんかいろんなもの、中国人が発明したのよって。心の中でどっかで思ってる…矛盾、自分の考え方。自分が思っていることすごい矛盾なんですよ。矛盾だらけ、私の中で…。自分で否定してもいいけど、他人に否定されるとめっちゃ腹立つ。自分はときたまめっちゃ否定するねんけど、向こうのことを…。他の日本人が否定するとめっちゃ腹立つ。

B③母国語の一つ(Bにとって中国語とは)。B③日本語、日本語って、母国語の何、でもな、自信ないっていうか、でもなあ、たまになまってくるやんか(Bにとって日本語とは)

B③今は日本も、自分の国みたいな感じになってきたかなあ。昔はぜんぜん他人の国っていうかんじだった…。今やったら、もうこっちのほうが多いかなあ。だって、年数もな16年たってるでしょ、こっち来て16年、17年くらいかなあ、忘れたけど、こっちのほうが年数多いじゃないですか…だからさあ、向こう帰ってたってなあ、他人の国みたいな感じになってる。自分の国やないみたいな。

B③どっちも中途半端。日本語自信ないねん。ますます自信ないねん。よう、たまに聞かれるやんか。私なあ、たぶんレベルはこれくらいしかないねん。能力は低いねん。他の人に比べて。

C①私は両方だと思っています。だから、よくお姉ちゃんとも言うんですけど、私たちみたいな立場の人が一つの国を作れば、シンガポールみたいな国があればいいのになって。うん、だから、そこへ行ったら、お互いの気持ちもわかるし…。きっと私らが言うてても、他の人がなるほどねって思っても、実際体験してみないと、わからないと思うんですね。…そういう何人、何人っというふうに今だにこういうふう ゆうてる世の中が いやなんですよ。日本人だったらどうなん、中国人だったらどうなん、みんなまあゆうたら、小さくわけたらア

ジア人でしょ。まあ、ゆうたら地球人でしょ。それが分けたことによってどうなんの、話す言葉だけの違いやん。でも、日本で生きて行くには、差別される一面もあると思う。

C②誇りまではいかないですけど、中国で生まれ育ったことに対して後悔はないですね。…それは、何ていうのかな、それ、中国で生まれ育った経験があつて、今こうして自分がいるわけやから、否定できないじゃないですか。…日本しか知らなかったら、まあ、想像がつかないですけど、世間知らずっていうたらおかしいですけど、もっと外の世界が見れなかったんやろなって。まあ、日本人でも、いろんなところ旅行行って勉強しに行ったりする人、多いけど、やっぱり旅行じゃなくて、そこで生まれ育って、生活して、そこに1、2年いたことが代えがたい経験っていうか。だから、後悔はないですね。っていうか。私たち中途半端やけど、ある意味でほかの人より、あのすぐれてるっていうか、うん、よかったと思っています。

C③中国語は生まれ育った国が中国でそこが中国語やっただけで、最初に覚えた言葉、私の中では、まあ世間でいう母国語。日本語は最初はその、私にとっては何っていうのかな、外国語のような感覚があつたんですけど、今は中国語と同じようにどっちが外国語かって言われたら、どっちでもないなあっていうかんじ。どっちも外国語、ある意味では。どっちもうまいこと使いこなせてへん…言葉で悩むことはないけど、自分は何人かと言われたら悩みますね。はっきり聞かれると、日本人って言えるかっていうたら、言えることは言えるけど、まあ、答えるまでに戸惑いがありますね。…はっきり日本人っていてもいいもんやろか。確かに日本国籍に帰化する前は中国籍やったけど、だからといって私は、そのときは中国人やと思ってたけど、だけど、ようよう考えてみたら、いちおう、おばあちゃん日本人やし、おじいちゃん中国人やし、私らは僅かやけど、日本人の血も入ってるよね。よくよく考えたら全く完全な中国人でもないし、だから、自分でも、完全にどっちか言えないですね。…日本人ですかって言われると、一応返事は「はい」ですけど、心の中ではどうかなって思うことがありますね。「はい」って言うっていいのかな、何を基準にして自分が日本人かってきいてるのかなって思うときがありますね。

D①私、中国人。だって、ほんまにそうやから。

D①あああ、あるかな（中国人か日本人か悩むことはあるか）。



D①でも、ほんまに中国人やんか、だって、お父さんが中国人やし、お母さんが日本人やん、私、中国人。

D③ははっきりゆうてどっちも自信ないかな（語学力を自己評価）。

帰属意識に関して2回目のインタビューでは明らかに変化が見られる。1回目のときは不安定さがあるとはいえ、全員が「中国人」であると答えていたが、来日18年目の2回目では「中国人」と答えたのはDだけであった。そして、その理由について父親が中国人だからと言っている。つまり、Dは中国に対する強い帰属意識やこだわりがあるから自分は中国人であると言っているのではない。その証拠に4人揃ってのインタビューで筆者が出自を問う質問に中国人と答えたのはDだけだったというDは「うそ、言うた？」と自分の回答も覚えていなかった。さらに、Aが出自についてわからないと答えたという「半々やしな」と共感するようなことも言っている。そして、帰属意識に関連した質問に対しては「深く考えたことなかったね」「何とも思わへん」などとそういうことにはこだわっていないことを強調する発言も多かった。A、B、Cについては出自を問うあるいは出自に関連した質問の答えから「中国人」という言葉が2回目のインタビューでは消えている。では、「中国人」という言葉の変わりにどのように表現しているのかというと、Aは「…何人じゃなくて中国で生まれて13年間いました。そこからここへ来ました。それしか…。何人とは言われへん」と出自を国という単位では考えずに時間の流れでとらえ、Bは「…同じ地球の人やからさ、どこの国の人でもいいやんと思うようになった」という言葉で表現し、Cは「…私たちみたいな立場の人が一つの国を作れば…」 「…小さく分けたらアジア人でしょ、まあ、ゆうたら地球人でしょ…」と言った。また、Cにとって中国とは何かという質問に「ええと、少年時代と答え、日本とはという質問に「大人になりつつ、自分が大人になって死んでいくところかな」と答えている。つまり、CにもAと同じように帰属意識を時間でとらえているのではないかと思われる発言があったことになる。

### 終わりに

Aは個別のインタビューでも4人揃ってのインタビューにおいても「…もし私らがほんまに20で日本に来ていたら違うと思うわ」「…13っていう10代の前半で来ている人は微妙な年頃やね」と思春期に文化間移動を行うことを客観視す

る発言をしている。言い換えるとAは思春期に文化間移動を行うものが辿り着くアイデンティティはより高い年齢で文化間移動を行った人ともより低い年齢で文化間移動を行った人とも違うということを行っているのだ。そして、思春期に文化間移動を行ったという共通体験を持つ同時期に来日した4人は同じ「帰属意識」を持つ特別な友人として互いに認識し合っている。

4人揃ってのインタビューで多くの情報を共有した後、次のような会話があった。

C：だいたい似たりよったりやな

A：でも、原点は一緒やな

C：うん、思うよ

A：みんな黒か白か決められへんところで迷ってる。でも決められへんと思うわ。死ぬまで自分が何人って

A：自分が死んだときお骨をどうするかっていうたら、どっちも撒いてっていうわ

B：でもな、私気持ちでは日本のほう向いてるわ

C：中間でいいねん、中間…。

## 注

- (1) 本稿は平成15、16年度 科学研究費補助金萌芽的研究「中国帰国者の子弟のアイデンティティ形成に関する追跡研究」の報告書を基に執筆した。
- (2) 思春期とは何歳から何歳までを指すかということについては書物などによっても多少の違いはある。上限は17、8歳と概ね共通しているが、下限に関しては約9歳から13、4歳と開きがある。

## 参考・引用文献

周飛帆 (1991) 「中国帰国生徒の異文化適応に関する研究」、筑波大学修士論文、49～69ページ

筑波大学社会学研究室 (1996) 『中国帰国者二世三世—中国と日本のはざままで—』、筑波大学社会学類、1995年調査報告、133～142ページ

福岡安則 黒坂愛衣 (2002) 「「中国帰国者」の私は中国人—ある女子学生の聞き取りから—」、『埼玉大学紀要』、第38巻、第2号 埼玉大学教養学部、

127～142ページ

蘭信三 (2000) 『「中国帰国者」の世界』、行路社、325～351ページ

(留学生センター助教授)